故郷へのメッセージ

生みの親、育ての親

松本市（三郷出身）吉村幸代

人生には、思ってもみなかった展開が待ち受けているものです。昨春の統一地方選挙に初出馬して、私は現在、松本市議会議員を務めています。予定に全くなかった航路、今もって信じ難い成り行きです。

温・明盛・小倉の三村が合併して旧三郷村が誕生した昭和二十九年、私は温上長尾の地に生を受けました。父は当時、村役場の職員でした。

やがて学窓を出た私は、会社勤めを経て結婚、松本市民となりました。出産を機に退職し、長らく専業主婦として過ごしておりましたが、平成二十年に地区から推薦を受けて寿台公民館長に就任、松本市教育委員会に籍をおく身となりました。

松本市では、公民館長の任期が六年と定められています。平成二十六年も残り半月となった早朝、母が亡くなりました。

選挙戦は終始にぎやかで、大きな祭りのようでした

私が無事に公民館長の任期を満了し、家庭内の諸々の段取りが落ち着くのを待っていたかのようなタイミングでした。地区の方々から出馬要請を受けたのは、葬儀の翌日のことです。

私が暮らす寿台という地区は、松本市の東南部の高台に位置します。まだ四十三歳の若い地区ですが、同世代の方々が一斉に入居してできた新興住宅街のため、その方々が一斉に高齢者となった今、高齢化率で市内三十五地区中の第三位。様々な課題が深刻化しています。地区の礎を築いてきた方々が「この先、どうなるのか。何としても候補者を」と望む気持ちは痛いほど分かります。

ずっと寝たきり状態だった母が他界して、これをもって夫と私の両親すべてを送り終えました。子どもたちも独立し、何ら心配はありません。家族も親戚も揃って出馬に大賛成。加えて、私自身はすこぶる健康です。「ここで出ないと、ずっと後悔し続けるよ」という息子の一言が、私の背中を押したのでした。

息子は笑いながら、「落選したところで、死ぬわけじゃなし」と付け加えました。私は「公民館長の延長で、一世一代の大きな祭りを主催するつもりで選挙戦を楽しんでやろう」と腹を括りました。

選挙戦はにぎやかなこと、この上ないものでした。志願してくれたポスター貼り隊六十人、まかない隊四十人……誰もが相変わらず「館長、館長」と呼んで支えてくれます。私ほど幸福な公民館長、そして候補者はいないことでしょう。

片や、戦いは極めて厳しいものでした。徒歩数分圏内に四人の候補者がひしめき合う最激戦区。開票速報の夜を思い起こすと、一年以上経った今でも動悸が激しくなります。

ところで、「二地域居住」という言葉を耳にされたことがあるでしょうか。以前は「半定住」などとも呼ばれていましたが、都市住民が農山漁村などの地域にも同時に生活拠点を持つようなライフスタイルをいいます。国全体で人口が減少する中、すべての地域で定住人口を増やすことはできないので、こうした視点を持って、地域への人の誘致・移動を図ることが必要とされています。

松本市議会　平成28年2月定例会にて

空き家の増加や地方の過疎化を食い止め、地域を活性化するための苦肉の策ともいえますが、私は松本市で議員生活を送りながら、亡き父から引き継いだ安曇野市三郷の家屋敷と農地を守って奮闘、まさに二地域居住を実践しています。

松本市はもとより安曇野市でも隣組に加入し、今年度は夫が農家組合長を仰せつかっていますし、元旦には夫婦揃って三郷上長尾の新年会に出席して、新しい年を寿ぎました。髪に白いものが混じり始めた幼なじみたちとの宴は、私にとってタイムトラベルのような楽しさでした。

また、こうした機会に交わした会話からヒントを得て、二月定例市議会に登壇。安曇野市の優れた取り組みを紹介するなどして、松くい虫被害対策について質問しました。二地域居住ならではの視点を強みに活動していきたいと考えています。

私の「生みの親」である安曇野市、「育ての親」の松本市。議員として、かけがえのない二市の架け橋のような存在になれたらとも願います。

慌しい日々の中、疲れ果てて安曇野に戻ると、ほっと心が和みます。水田を渡る風の清々しさ、歩き慣れた通学路に咲く野の花、人々のどこか懐かしい声、祖先に見守られている安心感。決まって私は呟くのです。「故郷よ、美しく発展を」と。

（よしむら　さちよ）